
奇跡の押し売りを粉碎した少女の話

HAL-HAL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奇跡の押し売りを粉碎した少女の話

【Nコード】

N0766BA

【作者名】

HAL-HAL

【あらすじ】

お正月スペシャルと称して作った急造の短編です。

内容はオリ主 in まどまぎのIF。

スタートは原作10話の半ば辺り。まどかが魔女化し、それに絶望して魔女化したほむらがまどかと仲良く世界を破壊している所から始まります。

急造ゆえに色々とおかしな点があるような気がしますが生温かい目で流してやって下さい。

原作主人公勢は一人も登場しません。

感想下さるとうれしいです。

（前書き）

読者の皆様、あけましておめでとうございます。

ささやかですが、正月スペシャルをお楽しみください。

白い生物、^{ナマモノ}インキュベーターには感情が無い。

何の感慨も無く、ただ現実を在りのままに見つめている。

見つめる先には、ただ破壊と暴虐の限りを尽くす二体の魔女。

「……鹿目まどかは魔法少女となってワルプルギスの夜と交戦。僅か一射でこれを完全に破壊した。その後その身に帯びた呪いから、ワルプルギスの夜を超える魔女と化した。

暁美ほむらは魔法の特性から再び時間転移するかと思われたが、極限まで精神が摩耗していたためかこれを放棄。最期は僕たちインキュベーターに恨みつらみを遺して魔女化。

彼女達二人の希望と絶望の相転移から得られたエネルギー量は莫大。しばらくは使い潰しても全く問題ない。本当に君達二人は良くやってくれたよ。これで宇宙は安泰だ。本当にありがとう。……だけど、実はまだエネルギー源が存在するんだ。君達二人に匹敵するエネルギー源が」

そう二体の魔女に言って、インキュベーターは振り向いた。

ルビーのような紅い双眸に映るのは一人の少女。

こげ茶色のショートカット、瞳も同じくこげ茶色。どこにでもいそうな、ごく普通の少女。

「君が来てくれるとは思わなかった。暁美ほむらに次いで僕の誘いに否定的だったのは君だからね」

「だって私、もう中三よ？ 魔法のステッキ振りかざしてキャッキ

「ヤウフフしてる年頃じゃないし」

少女は弱弱しく微笑した。若干幼めの容姿だが、精神年齢は割としっかりしているようだ。

対するインキュベーターも顔だけは笑顔を作っただけで応えた。

「君の考えがどうであれ、君には資格がある。魔法少女になる資格が。どんな願いでもいい。君の願いを一つだけ叶えてあげるよ。そして君は魔法少女になり、あの二体の魔女をやっつける。それでハッピーエンドだ」

インキュベーターの言葉に、少女は何か思いついたような顔をして言った。

「……そうね。じゃあ願いを言う前に、私の話を聞いてくれない？」

「君の話を……かい？」

「そう。私の進路相談。他に誰も聞いてくれる人が居ないのよ」

「……それもそうだね。僕でよければ構わないよ」

インキュベーターは周囲を確認し、惨状を確認して頷いた。

少女はそれじゃあと行って話を続ける。

「私があなたに出会ったのは、確か……私が中三に上がったすぐよね」

「結構前から君に目を付けていたんだよ。君の資質は稀有だからね」

「それから本格的に勧誘が始まった。毎日毎日私に会いに来てたわよね」

「人手は多い方が助かるからね」

「毎日『奇跡』と『魔法少女』って単語ばかり聞いてたような気がするわ」

「僕が君の願いを一つだけ叶えてあげる。どんな奇跡だって構わない。その代わりに君は魔法少女となって魔女と戦う。祈りの代価としてね」

「私が戦うかもしれない『魔女』って、何？」

「魔女っていうのは、グリーンフィードから生まれる、絶望や呪いから生まれた存在。魔法少女が倒すべき『敵』さ」

「なら、あれらが私の倒すべき『敵』？」

そう言って少女はインキュベーターの向こう側に存在する二つの存在に目を向けた。

インキュベーターは頷いて答える。

「そう。あれらが『魔女』だ」

「でもあれはかつて『魔法少女だったモノ』よね？」

少女は見ていた。鹿目まどかの雄姿を。暁美ほむらの慟哭を。

「そう。あれらはかつて『魔法少女だったモノ』のなれの果てさ」

「どうしてあぁなってしまったの？」

「僕と契約した時点で、魔法少女の証として、『ソウルジェム』を一つ持つ事になる。ソウルジェムは魔法を使ったり、持ち主がマイナスの感情を持つと穢れを溜めてしまう。普通ならグリーンフシードを使って穢れを取り除く事が出来るんだけど、それが出来なければ穢れを溜め続け、やがてグリーンフシードに変質し、魔女を生む卵になってしまう。その卵が孵化した結果が、あれさ」

そう言っただけでインキュベーターは少女から視線を逸らし、彼方で未だ暴力を振るい続ける存在を見遣った。視線に感情は一切、含まれていない。

少女は、ふうん。と、納得したようにインキュベーターと同じものを見遣っている。

「魔女とか魔法少女に、終わりはあるの？」

「無いね」

少女の問いに、インキュベーターは即答した。まるでそれが当然のようじ。

「どうしてそう言い切れるの？」

「この世界に負の感情がある限り、魔女はいくらでも生まれてくる。それに合わせて魔法少女もまた生み出し続けなければならない。そうしなければ、魔女が闊歩する世界になってしまう。君だってそんな世界、嫌だよな？　つまりはそういう事さ」

インキュベーターの説明に、少女はふうん、と頷き、じゃあさ、と続けた。

「もし、もしもの話よ。私が魔法少女になったとして、魔女が居なくなるまで戦い続けるとする。そうすると、私は40のオバサンになっても魔女と戦う魔法少女って事になる。それってアリだと思う？」

少女の突拍子もない話に、インキュベーターは狼狽の色を示した。

「そんな事例、見た事が無いからわからないよ」

「つまり、魔法少女は例外無く年を食う前に何らかの形で消えていくって事になるわよね」

「君は魔法少女を公務員か何かと勘違いしてないかい？ 魔法少女は常に死と隣り合わせなんだよ。魔女と戦う最中にソウルジェムを砕かれて死んだ魔法少女はいるし、グリーンフィードを使わずに穢れを溜め続けて魔女になった魔法少女も居る。長期間魔法少女でいる事はとても難しい事なんだ」

「ふうん……。サイターのブラック業者ね。なんでそんな所で働こうとする子が居るのか不思議だわ」

不思議がる少女にインキュベーターは不本意だ、とぼやいた。

「酷い言い草だね。でもその代わりに、魔法少女には莫大な報酬が与えられる。『奇跡』という名の、人の身に余る莫大な報酬。しかも前払いで」

「それって一個だけ？」

「どんな願いだって叶えられるんだ。そう何個もオーダー出来るものじゃないよ」

「生涯職のクセにそれはちょっと少ないんじゃない？」

少女から信じられない言葉が飛び出し、インキュベーターは目の前に居る少女を少女として見るべきか迷い始めた。本当に彼女は十代の花咲く乙女なのだろうか。

「そんなワガママを言ったのは君が初めてだよ。何度も言うけど奇跡は一回しか起こせない。それがルールだからね」

「となると……一番効率が良いのはお金かな？ ……でも短命だからなあ」

非常に現実的な考え事をする少女に、インキュベーターはでもさ、と言って二体の魔女を見た。

「まずは、あの二体の魔女をどうにかしないといけない訳なんだけど……君の力じゃ、あの二体の魔女に勝つのは難しそうだよ？ でも方法が無い訳じゃあない。『あの二体の魔女を倒したい』って願ってくれば、僕がその祈りを奇跡に変えてあげられる」

「却下。」

速攻で却下された。この状況で。彼女は頭のネジが何本か吹っ飛んでいるのだろうか。

「君は死ぬ気かい？」

「だってあなたの言う願いは刹那的なんだもの。そんなお願いしたら、あの二体の魔女を倒した時点で私の人生ゲームオーバーよ？命を捧げるには割に合わないわ」

「なら放っておくかい？ 別に僕は構わないけど、沢山の人で死んで、君も無事では済まないよ？」

「あなたは頭が固いのね。どうしてそんな一方しか救えないような考え方しかできないの？」

インキュベーターに感情は無い。故に怒りの感情は湧いてこない。しかし、少女と話していると不快感を感じずにはいられない。

「僕の事はどうだっていいじゃないか。それより、君の願いは決まっただかい？ 早くしないと魔女がこっちに来ちゃうよ」

「まだ時間はあるわ。折角だし、少しあなたの事について知っておこうかしら。これから長い付き合いになるかもしれないんだし」

少女の要求にインキュベーターは嘆息した。

「しょうがないなあ。僕の名前はキュウベえ。君たちに魔法の力を授ける存在で、魔法少女のサポートだってこなす、『魔法の使者』さ」

「へえ。そんな話、今まで一度も聞かされなかったわ」

「君が訊いてこなかったからね。『あなたは何者？』って」

「今更気にする事でもないか。つまり、あなたが魔法少女を生んできたのね」

ビシッ！ と少女はインキュベーターを指差した。

「そうさ。何度も言ってるじゃないか」

「一番最初の魔法少女って、いつ生まれたの？」

「有史以前さ。遙か昔から君たち人類は僕と契約を交わしてきたんだ」

ここぞとばかりにえっへん、とインキュベーターは胸を張った。しかし少女は特に反応する事も無く、淡々と質問を進める。

「じゃあ一番最初の魔女が生まれたのはいつ？」

「？ 有史以前だよ。どうしてそんな事訊くんだい？」

「魔女と魔法少女、正確にはどっちが先なの？」

「そんなの魔女に決まってるじゃないか」

「本当に？」

少女のしつこさにインキュベーターは眉を顰める。

少女の思考は十代乙女のものとは思えない。

何かある。そう予感せずにはいられない。

「……君は何が言いたいんだい？」

「例えばの話、バカな人間に『願いを一個叶えてやる』と言ったとする。大抵その人間は話に乗ってくる。そして契約。願いの代償に魔法少女という姿になり、魔女と戦う使命を帯びる。しかし魔女はどこにも存在せず、グリーンフィードは得られない。やがてソウルジエムが輝きを失い……あとは解るわよね？」

少女が言わんとしている事に気付いたインキュベーターは全身に衝撃を感じた。

この少女は魔法少女の誕生こそが全ての元凶だと、そう言いたいのだ。

「……つまり君は、魔法少女が先だと言いたいのかい？」

「もし魔女が先だったとしても、魔女の仕業は日本で言う『神隠し』みたいな怪奇事件で説明がつく。別にあなたの介入が無くても人類は何とかやっていけた筈よ。あなた、本当は何がしたいの？」

インキュベーターに感情は無い。だから恐れも感じない。

しかし、目の前の少女にある種の不気味さを感じずには居られなかった。

「まさか、年端もいかない少女にここまで問い詰められるとは思わなかったよ。……わかった。君には教えてあげるよ。僕の、いや、僕らの目的をね。僕らの本当の名前は『インキュベーター』。地球外生命体の、人類向けの端末さ。僕らの目的は宇宙の延命」

「宇宙の延命？ 魔法少女が宇宙を救うの？」

「それは今から説明するよ。この宇宙には多くの生命体が存在している。けれどもこの一つの宇宙が持つ資源は有限。使い潰されていくばかりだ。だけど、僕たちは画期的なエネルギー回収手段を見つけた。感情をエネルギーに変換する術を。ただ、一つ問題があった。僕らには感情が無かったんだ」

「……………」

少女は黙りこくっている。突拍子もない話に理解が追い付いていないのか、それともインキュベーターに対して憐憫の情を抱いているのか。しかし確認する気も、術も無い。
インキュベーターは話を続ける。

「僕たちは宇宙を旅し、そして遂に見つけたんだ。最も効率良くエネルギーを回収できる存在を」

「それが人類ってわけね」

「それも十代、思春期の女子。彼らの感情が希望から絶望へ変化する瞬間が、最も効率良くエネルギーを回収できるという結論に至った」

「それで私たちをエネルギー回収のターゲットにして搾取してきた、という訳ね」

「そうさ。感謝して欲しいね。君たちは宇宙の延命に役に立っているし、人類がここまで発展してこれたのは、僕たちインキュベーターのおかげなんだから」

インキュベーターの言葉に少女が小さく唸り声を上げる。

彼女が何を考えているのか、確認する術をインキュベーターは持たない。

「宇宙の延命……ね。それって本当に必要？」

「またもや突拍子もない事を言い出す少女。」

この少女は自分達にとって毒なのではないか、インキュベーターはそう思わずにはいられない。

「君は突然何を言い出すんだい？ いずれ君たち人類は宇宙に進出する事になる。その時枯れ果てた宇宙を渡される事になるんだよ？
それで良いのかい？」

「少なくとも今じゃない。私には関係の無い事よ。それに、始まりがあるものには必ず終わりもある。宇宙の終わりもまた必然。あなた達のやっている事は、指の間から零れる砂が無くなってしまふのが怖くて、何処からか砂を見つけては継ぎ足しているだけ。未練タラタラ。あなた達はどうか知らないけど、私たち人類は短命なの。そんなムダな延命に命張るほどヒマじゃないのよ」

「君たちと考えが合わないのは承知の上さ。それに、これから君達からのエネルギーの回収は期待できそうにないし、君がどう考えていようと君の勝手さ」

そう言ってインキュベーターは少しずつ近寄ってきている二体の魔女に目を向けた。

人類の終焉はそう遠くはない。婉曲的にだが、そう語っているのだろっ。

「……あなたは人類が弱くて愚かで救いの無いものに見えるかもし

れない。けどね、それは大きな間違いよ」

少女はそう言ってインキュベーターを見つめた。強い意志の光を宿して。

「それはつまり、この状況を打開する事が出来る、という事かい？」

「ええ、そうよ」

「それじゃあ、君の願いを聞かせてもらおうか。君はその魂を以つて、何を願うんだい？」

この瞬間を待っていたとばかりに、インキュベーターは少女に問うた。

少女は答える。

「その前に、私の考えが正しいかどうか、その証明が欲しいわ。聞いてくれるかしら？」

「君が僕と契約してくれるなら、どんなことだとしてあげよ。言うてごらん」

この時インキュベーターは思いもしなかった。この少女が持つ祈りによって自分が破滅に追いやられる事になるとは。

「『鶏が先か、卵が先か』って話、知ってる？」

インキュベーターは少女の問いに頷いた。

「鶏が卵を産まなければ卵は存在せず、卵が存在しなければ鶏もまた存在しないという、哲学的問題の一つだね」

ここでインキュベーターは気付いた。

「もしかして君は、魔女を鶏、グリーンフィードを卵に見立てるつもりかい？」

インキュベーターの言葉に、少女は首を横に振る。

「今の状況でどちらが先かを議論するなんてナンセンスよ。必要なのは見立てじゃない。問題の本質」

「問題の本質？」

「そう。この問題の本質は、『鶏にも卵にも、どちらにも生まれる原因があった』ということ」

彼女に指摘され、インキュベーターは思い至った。自らを貫く銀の弾丸の存在に。

「私が理解する『魔女』の定義。これはあなた達インキュベーターによってもたらされたもの。あなた達が居なければ目の前で起こっている状況をただの自然災害とみなしていたでしょうね。現に魔女の知識の無い一般人は自然災害としか考えられないでいる。あなたが『魔女』という概念を言いふらさなければ、『魔女』は存在しないも同然なの」

ここで一息ついて、少女は再び話し始める。

「そして『魔法少女』の存在。これは紛れも無くあなた達が原因よ。あなたが達が奇跡の押し売りなんて始めなければ、魔法少女なんて存在しなかった。理解してる？ 鶏が生まれる原因も、卵が生まれる原因も、全てあなた達にあると言っているの。インキュベーター」

少女は言い切った。しかしインキュベーターに狼狽の色は無い。

親が子に諭すように、インキュベーターは少女に言う。

「……本当に君は面白い。確かに原因は僕達にあつたかもしれないけど、それは過去の話だ。今直面する問題に対して、何の解決にもなっていない」

「そうね。確かにあの魔女を止める自信も根拠も無い。でも、半分は解決するわ。思春期の女の子たちが悪徳セールス業者に引っかかるらなくなる、という点では……ね」

少女はクスリと笑った。弾丸の装填はすでに終了している。あとはただ撃ち出すのみ。

「証明は得られた。喜ぶと良いわ、インキュベーター。あなたと契約を結んであげる」

「経緯はどうあれ、この時を待っていたよ。君がどんな願いを言おうと、君が魔法少女になる運命は変わらない。君もまたあれらのように良質なエネルギー源として宇宙の延命に大きく貢献する事になる。君の願いの一つくらい安いものさ」

インキュベーターの言葉を聞いて、少女は口元に笑みを浮かべた。

「なら、責任持ってちゃんと叶えてよね。私の願い、それは……」

…」

過去・現在・未来。その全ての時間軸における、インキュベーターという存在の全否定。

「!? な、なんだって!？」

弾丸は放たれた。願いという名の銀の弾丸。

直後、少女の体から光が溢れ出した。

「そんな……そんな願い、認められる筈が無い！ 君は今までの人類の歩みを否定するつもりかい！？ 僕たちが居なければ、人類は今も原始時代から何も変わって無かったかもしれないだよ!？」

「十代乙女の奇跡なんてタカが知れてるわ。そんなんで世界は大きく変化しない。世界を動かしているのは幻想じゃない。現実なの」

少女から溢れる光が凝縮され、宝石のような形を成す。

彼女の掌では、純白のソウルジェムが未だに輝きを放っている。

「契約……成立ね」

「そんな……こんな無茶苦茶な契約……認められるはずが……」

「でも、これから私の願いが叶えられる。だから、このソウルジェムが掻き消えるまでが私の勝負」

そう言つて少女は自身のソウルジェムを、二体の魔女に向かつて振りかざす。

直後、インキュベーターですら驚愕を隠し得ない出来事が起こつた。

魔女が、自壊したのだ。

「そんな……一体何が……!？」

インキュベーターは少女のソウルジェムを、魂の形を覗き、絶句した。

「君の特性が分かつた。君の特性は『粉碎』。物の硬さも、大きさも関係無い。立ち塞がる全てを打ち砕く理不尽の体現。それが君の正体が……」

「つまり、私は魔法少女として最強だつた、つてこと？」

「……理論上はね」

「それは惜しい事をしたわ。でも私、魔法のステッキを振りかざしてキャツキヤウフフする趣味は持ち合わせていないの」

「本当に惜しかった。残念だよ」

ここで一人と一匹は気付いた。インキュベーターの体が少しずつ薄れている事に。

「どつやら君の願いはしっかりと叶えられるらしい」

「言っておくけど、この選択に後悔は無いわ」

「本当に？ わかっていると思うけど、僕らが居なくなってもこの世界に魔女は残る。本当にそれでも良いんだね？」

「絶望や呪いから魔女が生まれるなら、それ以上の希望と祈りで塗り潰すだけよ」

少女の有無を言わさぬ答えに、インキュベーターは嘆息した。

「もうすぐ消えるっていうのに、容赦無いなあ」

「粉碎するのが、私の魂の在り方なんでしょう？ そう簡単に変えられるものじゃないわ」

それもそうだね、と言ってインキュベーターは消えた。

まるで存在そのものが幻想だったかのように。

少女が持つソウルジェムもまた、インキュベーターの消失とともに少女の掌から消えた。

インキュベーターが人類に及ぼした影響、その全てを無かつた事クリーンアップにしているのだ。

しかし、世界は何も変わらない。

コンクリート造りの建物が無くなる事も、祈りに身を捧げた少女が還ってくる事も。

今、少女の目の前には、嵐が過ぎ去った後の静かな光景。
地平線に浮かぶ、夜明けの光。

少女はつぶやく。

「インキュベーター。最後に一つ、言わせてもらおうね。人の英知は、奇跡で蓄積できるものではない。経験と痛みを重ねて蓄積する物なの」

そして少女は瞳を閉じ、祈った。これまで人知れず戦い、儂い命を散らせてきた魔法少女の魂に、安らかな眠りが訪れる事を……。

(後書き)

楽しんで頂けましたでしょうか。

ご意見ご感想は感想版の方へどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0766ba/>

奇跡の押し売りを粉碎した少女の話

2012年1月1日22時47分発行